２年ぶりで入ったお風呂はなんとも言えないほどよい気持ちでした……
きれいな洋服を着せていただいた時、今まで男の洋服を着ていたので、
なんとなくヘンな気がいたしました……（「卒業者感想文綴」より）

定価― **33,000** 円（本体 30,000 円＋税 10%）
体裁― A4 判・上製函入・268 頁／
付録 DVD『ここに母（ママ）さんがいる　或る養護施設の記録』（1964 年）
ISBN978-4-8350-8662-0 C3036

写真記録 戦争孤児 全１巻
その後 ― 愛児の家史料

編著者　**浅井春夫**（立教大学名誉教授）・**艮香織**（宇都宮大学准教授）
酒本知美（日本社会事業大学准教授）
推　薦　**大友昌子**（中京大学名誉教授）・
本庄 豊（戦争孤児たちの戦後史研究会代表）
協　力　社会福祉法人**愛児の家・昭和館**

お薦め先　大学・公共図書館／社会福祉／児童養護／近現代史などの研究者

2024 年 1 月刊行！

好評既刊書！

戦争孤児関係資料集成 第Ⅰ期
愛児の家史料 全5巻・全2回配本

「終戦からが地獄の日々のはじまり」ともいわれた、戦争孤児たちの過酷な状況を克明に伝える、はじめての本格的な史料集成！「ママさん」とよばれた石綿貞代がはじめた「愛児の家」の、終戦直後からの膨大な史料。とくに「退所児童措置指導記録簿」は児童の来歴、家族構成、孤児になる経緯、その後の成長までを詳述。戦争孤児研究のため、ほかに類をみない充実の史料群。

【編集･解説】**浅井 春夫**（立教大学名誉教授）・**艮 香織**（宇都宮大学准教授）
酒本 知美（日本社会事業大学専任講師）
【推　　薦】**大友 昌子・本庄 豊**
【協　　力】社会福祉法人 愛児の家
【揃 定 価】**115,500 円**（揃本体 105,000 円＋税 10%）
【体　　裁】Ｂ５判・上製・布クロス装・総約 1900 頁

第１回配本 第１－３巻（全３巻）	約 1200 頁	**定価 69,300 円** （本体 63,000 円＋税 10%）	978-4-8350-8372-8	2020 年 11 月刊
第２回配本 第４・５巻（全２巻）	約 700 頁	**定価 46,200 円** （本体 42,000 円＋税 10%）	978-4-8350-8376-6	2021 年 2 月刊

配本	巻数	収録史料名（表紙記載事項による）	記述年
第１回	第１巻	退所児童措置指導記録簿〔1〕	1945～
	第２巻	退所児童措置指導記録簿〔2〕	
	第３巻	退所児童措置指導記録簿〔3〕	
第２回	第４巻	児童名簿	1947～
		育成記録〔1〕	1954～
		育成記録〔2〕	1954～
		育成記録　自昭和二十九年七月	1954～
		昭和二十四年以降　里子関係書綴　中児関係書綴（受）	1949～
	第５巻	役員職員名簿　昭和二十年十一月一日起（2）	1945-1950
		来訪者 慰問団 名簿　自昭和二十二年七月起	1947-1954
		金銭（物品）寄附控帳　自昭和二十五年度	1950-1958
		社会福祉法人関係書類綴（正本）自昭和二十七年	1952-1953
		収益事業関係書類	1947-1953
		CCF 及びバットセンター書類及び控綴	1957
		卒業者感想文綴	1952-1975
		海外在留者 外国人 在日外国人 書簡綴　弐拾六年度	1951
		書簡綴　昭和二十五年	1950
		書簡綴　昭和三十一年度	1956

戦争孤児関係資料集成 第Ⅱ期
関西編 東光学園史料ほか
全８巻・全３回配本

戦争孤児の全体像を捉えるために欠かせない、「東光学園史料」をはじめ、障害児教育の先駆けともいえる八瀬学園、東光学園とその孤児収容を二分した大阪水上隣保館、そして大阪市梅田厚生館の初期の年史など、奇跡的に残されていた関西における史料群を一挙に集成！東光学園に残された貴重な写真は、編集復刻で「写真記録」として収録。

【編集･解説】**本庄 豊**（戦争孤児たちの戦後史研究会代表）
玉村 公二彦（京都女子大学発達教育学部教授）
平井 美津子（大阪大学・立命館大学非常勤講師）
【推　　薦】**山田 朗・小野川 文子**
【協　　力】社会福祉法人 東光学園・社会福祉法人 大阪水上隣保館
【揃 定 価】**211,200 円**（揃本体 192,000 円＋税 10%）
【体　　裁】Ｂ５判・上製・布クロス装・総約 2090 頁

第１回配本 第１・２巻（全２巻）	約 740 頁	**定価 52,800 円** （本体 48,000 円＋税 10%）	978-4-8350-8586-9	2022 年 12 月刊
第２回配本 第 3-5 巻（全３巻）	約 1100 頁	**定価 79,200 円** （本体 72,000 円＋税 10%）	978-4-8350-8589-0	2023 年 5 月刊
第３回配本 第 6-8 巻（全３巻）	約 850 頁	**定価 79,200 円** （本体 72,000 円＋税 10%）	978-4-8350-8593-7	2023 年 11 月刊

配本	巻数	主な収録史料名（表紙記載事項による）	記述年
第１回	1	昭和二十七年 児童保護名帳	1952
		昭和二十八年度 児童保護名帳（Ｎｏ１）女	1953
	2	昭和二十八年度 児童保護名帳（Ｎｏ２）男	1953
		昭和二十九年度 男子 保護台帳綴	1954
第２回	3	昭和二十九年度 女子 保護台帳綴	1954
		昭和三十年度 児童観察簿	1955
		三十一年度 児童保護台帳	1956
	4	昭和三二年度 ケース記録 女子 盲３	1957
		家庭日誌 昭和二十四年四月	1949
	5	昭和二十三年十月 ラ・ラ関係通牒	1948
		孤児浮浪児教育研究録 堺市立東百舌鳥小学校分校	1948
第３回	6	ＪＯＢＫ「春を待つ孤児達」台本	1949
		昭和二十五年 放送日誌	1950
	7	東光学園 写真記録〔編集復刻〕	1956
		東光新聞	1950-64
		山ばとの子ら 特別学級の経営五ケ年を顧みて（門永庄一郎）	―
	8	精神薄弱児施設 京都府立八瀬学園 要覧（八瀬学園）	―
		昭和廿八年十月 保護教育概況書（八瀬学園）	1953
		学習指導案（八瀬学園）	1955
		昭和三十年十月 保護指導要覧（八瀬学園）	1955
		『こども』創刊号（京都師範児童研究後援会）	1953
		収容保護事業十年の歩み（大阪市立梅田厚生館）	1955
		美しき幻を見ながら 五〇年の歩み（水上隣保館）	1981

表示価格はすべて税込

不二出版
〒 112･0005
東京都文京区水道２･10･10
TEL 03･5981･6704
FAX 03･5981･6705
振替 00160･2･94084

1945年、敗戦を迎えた戦後社会に取り残された「戦争孤児」――

飢えと寒さ、孤独に陥った彼らに手を差しのべ、温かい家庭に迎え入れた「愛児の家」、
その知られざる全貌を伝える貴重な写真の数々を、豊富な史料とともにヴィジュアルに集成！

写真記録
戦争孤児
その後 ―― 愛児の家史料

War Orphans in Occupied Japan:
a Collection of Selected Photos at "Aiji-No-Ie"

浅井春夫・艮 香織・酒本知美
Haruo Asai, Kaori Ushitora and Tomomi Sakamoto

窮乏を生き抜いた子どもたちの実情を伝える
――大友昌子［中京大学名誉教授］

本書の刊行が、近年盛んになってきた戦争孤児研究の背中を、
力強く押してくれることは間違いない
――本庄 豊［戦争孤児たちの戦後史研究会代表］

招待された米軍空母の甲板を歩く子どもたち（1955 年 12 月）

不二出版

「戦争孤児」と呼ばれた子どもたちが温かい愛情によってとり戻した笑顔――

内容見本

(本文82%)

1．愛児の家の誕生

愛児の家の誕生は、1945年9月24日である。ある日、友人が電車にいた家のない男の子を連れてきた。「ママ」とよばれることになる石綿貞代（1897-1989）は、自宅でその子を保護することを決意した。

この2カ月後の1945年11月、貞代は戦災孤児救護婦人同志会を設立した。そして上野駅の浮浪児たちを多数、養育していく。その名称は「愛児の家」。1952年には社会福祉法人愛児の家となり、「戦争孤児」をはじめとして、多くの子どもを養い育てることとなる。

孤児たちは1947年の夏には、最多の107名まで増えたという。写真は門を入ってすぐのブランコの貞代と子どもたち。子どもたちが万歳をしているのは、米軍の撮影者にうながされて（1950年代）。

食堂にて。設立から20年近く経過し、愛児の家の生活はすっかり安定したものとなっていた（1965年ころ）。
貞代の右上には米海軍カルバート号（USS Calvert）の写真が飾られている。艦船乗務員の援助は1949年から66年まで続き、その後は同海軍セミノール号（USS Seminole）に引き継がれ、70年まで行われた（→**8章**）。

(本文52%)

運動会の前に、中庭に並んだ子どもたち。
彼らの多くは戸籍がなく、入学のために戸籍を収得しなくてはならなかった。放浪生活のために学力が不足していた彼らは、実年齢よりも下の学年に入ることも多かった。そのせいもあって、みな足が速く、徒競走では1位ばかり。貞代は彼らの奮闘に大喜びだったという（1950年代）。

中庭でのラジオ体操（1950年代）。

「シャーウッドの森」で、走り高跳びの練習に励む子どもたち。
古い日本家屋だった愛児の家の庭には巨石が多く、子どもたちが走り回るのには不都合だったためである。高跳びの道具も、子どもたちのお手製（1950年代）。

クリスマスに招待された、空母ボイント・クルズ号の甲板を歩く子どもたち（1955年12月）。

米空軍ジョンソン基地（埼玉県。現・航空自衛隊入間基地）のアメリカンスクール教師・ジェイムズ・レンツ（James Lenz. 通称「ジミー先生」）らが航空ショーに招待した（1964年10月）。子どもたちの姿がコックピットにみえる。

(本文38%)

(本文50%)

9．「米軍の援助」という視点

前章「米軍の支援」でみたように、愛児の家と米軍との関わりは深い。個々の米兵たちが善意と情熱にあふれて愛児の家を訪れたことは、米軍が愛児の家を「よい占領」のショーウィンドウとして利用したことと矛盾しないだろう。米軍の準機関紙である『星条旗新聞』はもちろん、彼らの「慈善」活動には、広報戦略的な側面を切りはなすことはできない。撮影された多くの写真からも、不条理な戦争の犠牲者として、米軍の庇護を必要とする弱き者として、ことさらに戦争孤児を描き出す視点を感じさせるものがある。そ

これらの写真は、帰国する米兵から愛児の家に寄贈されたアルバム（1955年ころ）による。EMクラブ（→**8章**）と米海軍・海兵隊士官夫人会が、1949年より支援を開始したことがわかる。
そこでは、哀願するような「いたいけな子どもたち」というイメージが強く投影されている。アメリカ人の心に訴えかけるためだろうか。写真の主役には欧米人と日本人とのダブルの孤児が選ばれたという。

手づくりのアルバム表紙には、

愛の家
Home of Affection
Tokyo-Japan 1949-
U.S.Navy E.M.Club and
U.S.Navy-Marine Officers Wives Club

と記されている。

敗戦直後の日本における「戦争孤児」という現実に、愛児の家の職員や支援者たちがどのように立ち向かったのか？それは「いま」「ここにいる子どもたち」にどう向き合うのかという問いを、現代の私たちに投げかけている ——

孤児が語った当時の上野駅周辺の様子

僕は昭和二十三年一月頃に横浜から東京上野駅（へ）夜（ママ）る友達と二人で来ました。……まず一番最初に上野地下道にきますと驚いたことには地下道も両側に浮浪者がさまざまな恰好して、およそ五百人ぐらいいました。僕達は地下道で一夜をすごしま（し）た。そのときの寒さは今までもはっきりと記憶しています。僕たちは朝から靴みがきをやる所をさがし求めました。そろ（れ）は上野公園のがけの下の人通りの良いところで二人でやりました。一日はやっとたべられるぐらいわ（は）かせぎました。

愛児の家史料13「卒業者感想文綴」（『戦争孤児関係資料集成Ⅰ』第5巻収録）より

写真（上から）■ 東京中央郵便局民事検閲局で働く愛児の家の少年／ボタン製作所に就労した少年たち／愛児の家の門前にすわる／「戦災孤児救護婦人同志会本部」と英語と日本語掲げられた表札前で／ララ物資を受け取って

DDTを大量にふりかけられた児童と米海軍夫人会の支援者たち（1954年）

ここに収めた「愛児の家」草創期の写真や史料は、敗戦直後という時代をくぐり抜けてきた「戦争孤児」のその後の実情と、彼ら子どもたちとともに、愛児の家の職員と支援者たちが「現実にどう、立ち向かったのか」を伝えてくれる。

占領軍の視線、検閲という制約もあるなかで、新聞や雑誌が“撮りあげた”1コマ1コマが、「いま」「ここにいる子どもたち」にどのように向き合うかという問いを、現代の私たちに投げかけられていると感じている。

編者のひとりとして　**浅井 春夫**　立教大学名誉教授

本書の特色

Ⅰ．アジア・太平洋戦争の戦禍によって、東京、大阪、名古屋、京都など大都市に少なくとも12万人は発生したとされる「戦争孤児」。各地の児童保護施設でも散逸いちじるしい当時の記録を、奇跡的に保存する東京都中野区の「愛児の家」に残された写真から、戦後の孤児たちの生活を伝える貴重な写真史料を厳選。愛児の家・創設者の石綿貞代（いしわたさたよ）（1897-1989）、家族、職員はじめ多くの人びとが愛情と情熱を込めてはぐくんだ子どもたちの生きざまがいま、よみがえる！

Ⅱ．220点もの写真を、浅井春夫らの調査をもとに写真記録としてヴィジュアルに構成・解説。資料編として、新聞記事125点、雑誌記事17点を収録。さらに愛児の家の様子を報じた記録映像『ここに母（ママ）さんがいる　或る養護施設の記録』（1964年）をDVDとして附す。

本書内容

発刊にあたって
時代の良心としての「愛児の家」創設と実践　浅井春夫
二つ目の宿題　神戸澄雄

収録資料一覧

愛児の家平面図（1965年当時）

解説　酒本知美

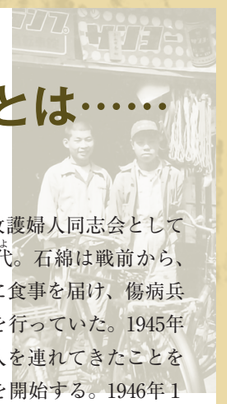
第Ⅰ部 写真記録
1．愛児の家の誕生
2．温かい食事と家庭
3．子どもたちと遊び
4．学ぶということ
5．さまざまな行事
6．子どもたちのライフサイクル
7．さまざまな支援者たち
8．米軍との交流
9．「米軍の援助」という視点

第Ⅱ部　資料編
1．新聞記事
2．雑誌記事
3．愛児の家年表

あとがき

附録DVD
「ここに母（ママ）さんがいる　或る養護施設の記録（1964年）」

「愛児の家」とは……



1945年11月1日、戦災孤児救護婦人同志会として活動開始。設立者、石綿貞代（さたよ）。石綿は戦前から、上野駅周辺の女性や子どもに食事を届け、傷病兵を慰問するなどの慈善活動を行っていた。1945年9月24日、友人が孤児の一人を連れてきたことをきっかけに、児童保護活動を開始する。1946年1月には、上野駅にいた浮浪児たちを連れ帰り、さらに積極的に子どもたちの養育につとめた。同じころ「愛児の家」という名称が定まり、1947年夏には最多の107名が入所。その家庭的な養育には定評があり、上野駅や他の養護施設の児童のあいだでも、愛児の家の待遇のよさは有名であった。1948年、児童福祉法施行により、入所者数に定員が設けられた愛児の家は、親探しや引き取りの調整、他施設への措置変更や里親委託もすすめる。1952年、社会福祉法人となり、戦災孤児救護婦人同志会はその役目を終えた。現在の入所定員は36名、大舎制で運営。「一貫性のある家庭的処遇」をモットーとし、生活のなかでもとくに食を大切にした養育を心がけている。

愛児の家・戦争孤児 関連年表

1945
1月　東京都疎開学童援護会、発足
3月　東京都養育院が、東京大空襲による孤児、31名を収容
5月　東京都疎開学童援護会が、孤児収容開始
6・22　戦災遺児援護対策懇談会（厚生省、戦災援護会）、開催
7月　戦災援護会が子供の家（東京都杉並区）設立、乳幼児を収容
9・15　戦災孤児等集団合宿教育所二関スル件（文部省）により、17カ所以上の戦災孤児等合宿教育所、設置指示
9・20　戦災孤児等保護対策要綱（厚生省）
9・24　石綿貞代の友人が一人の浮浪児を連れてくる。石綿の自宅を開放した、孤児のための「愛児の家」開始のきっかけ
10月　東京都で浮浪児を主とした一斉狩込み実施
11・1　戦災孤児救護婦人同志会、設立。会長・石綿貞代

1946
1月　愛児の家、世田谷下馬に支部（分院）設置
2・28　愛児の家世田谷の支部を天皇陛下が視察（「石綿さんですネ、ご苦労様」とのお言葉あり）
4・15　浮浪児その他の児童保護等の応急措置実施に関する件（厚生省）
5・6　愛児の家に加藤シズエ来訪。児童数20名。
9・19　主要地方都市浮浪児保護要綱（厚生省）
秋　ロンドンタイムス記者、マジョリー・スコットらと愛児の家を訪問。海外のメディアに紹介される

1947
1月　東京中央郵便局の民事検閲部人事課長、ミス・リードの紹介により、児童11名が東京中央郵便局のGHQ民事検閲部（CCD）に給仕として雇用される
5月　銀座コロンバンに児童3名就職
5・23　「少年の町」のフラナガン神父、愛児の家来訪
7・5　ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」放送開始（～1950年12月）
12月　児童福祉法公布（1948年1月施行）

1948
2月　全国孤児一斉調査（孤児、12万3511名）
3月　愛児の家、収容児童数84名
11・5　浮浪児根絶緊急対策要綱の実施について（厚生省、文部省ほか）
11月　里親制度開始
8月　愛児の家、収容児童数76名
秋　CCD解散。就業していた児童は退職金をもらい転職
12月　米海軍のフレームが子どもたちをクリスマスに招待

1950
11月　全国養護施設協会、結成